

街で花婿・花嫁に出会える日本に

〈リーマン・ショック以降、限られた人だけで行う「ジミ婚」傾向が強まるとともに、結婚式を挙げない「ナシ婚」も増加した〉

例えば芸能界もジミ婚、ナシ婚が増えましたね。「誰と誰が婚姻届を出しました」と報じられることはあっても、最近は「芸能人がこんな結婚式を挙げた」という報道はあまり見かけない。いわんや結婚式の中継番組…ですね。

昔は「何億円ウエディング」などと芸能人のハデ婚が話題になりましたが、あれもあまり良くない。普通の人はなかなかまねできませんから。逆に今、有名な人気者が「これだけの予算でこんなすてきなウエディングができた」と番組などで示したら、「私たちもできるかも」と若い人に思ってもらえるのではないかしら。

〈結婚式のありようだけではない。昨今は非婚、晩婚による少子化対策が急がれている〉

元来、結婚の決まった人にアドバイスをしたり、結婚式をプロデュースしたりするのが私の仕事だったのに、最近は「いかに結婚を増やすか」という方面の講演依頼が多くて…。なんて皮肉な人生なのかなって思います。でも何とか現状を打開しないといけない。

私たち民間に何ができるかを考え、平成18年から、デートやプロポーズなどに最適なスポットを「恋人の聖地」として認定し育ててゆく運動を全国各地で始めました。現在は国内外に1

30カ所以上あり、旅の提案やスイーツなどの開発、各種割引など、各地がカップルを呼び込むさまざまな努力をしているんですよ。

また、生まれ育った地域の魅力を生かした市民参加型の結婚式「ふるさとウエディング」運動も4



今年2月、桂由美50周年記念コレクションのショーが東京都内で盛大に開かれた

年前から展開しています。これは、自宅で婚礼衣装を身につけた花嫁が、お世話になったご近所にあいさつをし、その祝福を受けながら式場に向かうというスタイルの推進です。総務省や観光庁の後援のもと、地域の魅力を生かした婚礼のアイデアを競い合う「ふるさとウエディングコンクール」も毎年実施しています。

私が子供のころ、花嫁さんは家で支度をして嫁ぎ先へ出発したものです。その美しい姿を見て、女の子たちは「早くお嫁に行きたい」「いつか、あんなきれいな格好をしたい」と憧れたんです。でも日本では今、街の中でカップルの幸せな姿を見ることはなくなってしまいました。普段着で家を出て、式場で着替えて、また普段着で家に戻る…。これは日本だけかもしれない。欧米でも、中国や韓国などアジアでも、婚礼衣装を身につけた幸せいっぱいのカップルに街中で出くわしたり、教会で見ず知らずの人の結婚を祝福したりすることは珍しくありませんから。なんといっても結婚式は、見ている方まで明るい気持ちになりますよね。

今こそ社会全体として、結婚にきちんと向き合う空気を醸成したいのです。取り組み次第で将来は変われると思いますよ。

（聞き手 黒沢綾子）

― 次回は脚本家の橋田壽賀子さん

話の 肖像画

ブライダルファッションデザイナー
かつら ゆみ
桂 由美 5